理研会報

発行
印旛研 理科研究部
事務局
成田市立成田小学校内

第36次教育研究集会 盛会に終わる 10.14

＝会員の声＝

臼井小　増田美知子

研修の積み重ねがあるからでしょうか。先生方が自信をもって熱ぼく提案される姿に感動いたしました。毎日の授業や学校行事等をこなしながら、研究の成果をあのように細かくまとめられたことは容易なことではなかっただろうと頭の下がる思いです。

教材・教具を選定し与えていくことは、子どもに成功感を味わわせ、意欲的に学習させるためにも必要なことですので、大変参考になりました。しかし、その与え方によっては、子どもの創意工夫を限られたものにしてしまう恐れもあるように思われます。与え方をよく考慮して、とり入れさせていただこうと思います。

佐倉小　里澤安雄

第三十六次教育研究集会も理科分科会に参加させていただく。熱意ある、内容の充実した、現場に連結する各部会からの発表があった。一つテーマを掲げ、貴重な研究資料をもちより、各学校から選出の熱心な研究員の先生方が遅くまで研究討議なさっている姿を見て頭の下がる思いがしました。一人ひとりを大切にする教育として、基礎・基本を大切にする教育　時代の要請にこたえるべく各分野での熱のこもった発表をきかせて頂き、大変有意義な一日を過ごすことができました。この研究にかける熱意が理科だけにとどまらず、日常生活に対処していける大きな力になってほしいものです。

北辺小　山岸文雄

最近は、どの部会もグループ研究が定着し、共同提案が多くなった。提案要項もよくまとめられており、発表方法も視聴覚機器を使うなど工夫されており、大変わかりやすかった。ただ、研究の中味について言えば、部会によっては、やや視野の狭い研究で終ってしまったものもあったようだ。また、理論が先行しすぎて、研究のための研究のような感じを受けたものもあった。研究の成果がいちはやく授業に生かせるようなものであれば都合が良いと思う。

それにしても、研究を進めるためのチームづくりにどの部会も苦労していることがよくわかった。

＝助言者の声＝

低学年分科会　五味　健

どの部会も十分な時間をかけた研究と言える内容を持っているのは、特質に値する。なかでも、三部会の研究は、実に十年にわたる。唯、この研究をどう集約するかが問題である。これは、何も三部会に限らない。

この辺で、各部会の現在の研究とは別に、今までの成果を集約する必要があろう。この事のメリットは多くあるはずである。

次に考えたいのは、「研究の成果をどう広めるか」という問題である。各分科会に参加した先生方が、成果を学校に持ち帰り、色々な方法で理解してもらうようにしたい。

ところで、低学年分科会のあり方が大きな課題となる。特に、一二年の理科がなくなり、「生活科」の教科ができた時、どう扱うか。それにより、分科会の在り方が変るはずである。今から考えておく必要がある重要課題である。

最後に、授業実践について考えたい。全体的に、やり易い単元を選んでいる傾向がある。それでもそれなりの効果はあるが、より強い説得力を持たせるには、やりにくい単元を扱うことが望まれる。それを、先生方は待っているはずである。

高学年分科会　山本　巌

各部会の研究内容は、何れも日常の授業実践から生じた課題性の高いものであり、参加会員にとっても明日からの授業改善に多くの示唆を得られたものと考える。

更に、研究発表の仕方にもユニークさが伺われ、例えば開発した教具を実物提示して説明したり、検証授業をVTRに収録して視聴してもらうなどよく工夫されていた。総じて、共同研究が地についており、内容が充実していた。

五部会の「気づき考える力を育てる」観察・実験では、ダイナミックな教具の開発や授業展開とともに、指導計画への位置づけや児童の変容の度合などが追求されており、総合的にみて三年次の研究にふさわしい研究の厚みと深まりを感じることができた。

一部会の「発想を生かす」授業づくりは、精力的な展開であり、特色ある内容として注目していきたい。また、二部会の教師用「植物野外観察のガイドブック」は実に労作である。

三部会の「ほのお」の教具開発ではデータの収集・処理が的確であった。また、四部会の個別指導は、今日的課題であるだけに、実態調査の貴重な資料を一層分析し、研究を焦点化していただきたい。

中学校分科会　折目庸雄

本年度の教研集会の特色は、工夫された教具が多く持ちこまれたことである。言葉や図示の説明とは異って、物が会員に直接はたらきかけ「学校へ帰ったら作ってみよう。」とか「ここをもう二工夫したら」とか具体的な示唆を投げかけたように思う。理科ならではの良さが具現されたとも言えよう。

しかし、反面危惧もないわけではない。その教具を授業のどこに位置づけ、どう与えていくかによっていろいろな効果が期待できるわけだから、既に断定は下せないとしても、そのいづれもがわかりやすさをねらった教師主導を感じさせる教具であったことである。事物現象と生徒のでありを効果的に演出する教具。適度のわかりにくさを含む、より細かい観察へ導いたり、より深い思考へ誘ったりする、そんな観点からもう二工夫ほしいものである。

教研の基本単位は、各部会、教校または十教校の共同研究である。これは、やりにくい研究体制ではあるが波及効果は大きい。とすれば、主題を思い切って絞ってみることを考えてみたらいかがだろうか。一年で達成された小主題の研究の価値が、期間の短かさで削限されることはないはずである。

印旛研理科研究部に参加して

千代田中　桜井菜津子

新しい知識を得る。一つの疑問が解きあかされる。どちらをとっても、人間の知的好奇心を満足してくれるものである。我々は日々生活していく中で、おや？と不思議に思う事柄によく出合う。なぜ昼と夜があるのだろう。なぜ雨が降るのだろう。誰もが一度は不思議に思った事柄ではないだろうか。その一つ一つを解決していく中で理科というものに心ひかれていくのだと思う。

最近、二人の生徒が質問に来た。三年生の女子である。頭の回転もはやい。しかし彼女たちは、夕方西の空に見える月は、満月でも半月でもない三日月に他ならないことを知らなかった。普段何気なく空を見上げていれば、当然気づかざるを得ない事実である。他から指摘されるまで気づかないのは、何とも寂しい気がする。

「一人ひとりが気づき考える力を育てるための観察・実験の工夫」というテーマは、このように何か一つの現象をじっくり観察することのできない子どもたちに、ぜひとも必要な研究主題であろう。このテーマを掲げて、様々な学校から集まった研究員が討論し、アイデアを生かした実験器具を開発する新しいものを開発する意欲、研究の合い間に聞かせる自然した議論参加してみて、実に快い気分を味わうことができた。また、来年の秋に向けて、研究が進められていくはずである。その時また、ああ、参加してよかったと思えるような理科研究部でありたい。

（昭和60年度新規採用教員）